

そう納得したところで臨也の買い物は無事終了した。そして、今度は二人でスーパーに向かう。

それは鍋の材料を買うためで、帝人ならばまず選ばない高めの肉を迷わず選ぶあたりが彼らしい。材料費も彼持ちだし、文句はないが贅沢な人だなあ、と思う。

その羽振りの良さも人気の理由なのだろうが、女性たちはそうやっていろいろとプレゼントされて、ただ単純に嬉しいものなのだろうか。帝人にはとても喜べないから、非常に疑問だ。

そんなことを考えつつ、一応二人で会話もしつつ、鍋の材料を買い物かごとへと放り込む。最終的には結構な量になり、清算後、つめてみるとスーパーの大きなビニール袋がばんばんになるほどだった。

「あ、僕持ちますね」

「良いって。俺の方が腕力あるしね」

そうかもしれないが、材料費を出してもらった上に荷物持ちまでさせるわけにもいかない。しかも鍋本体とカセットコンロ、コーヒーマーカーもすでに持っている。……が、結局押し切られてしまった。とにかく彼は口が達者で敵わない。どうにかコーヒーマーカーだけは帝人が持つことになったが、あきらかに重さと大きさが比べものにならない。

（僕が女の子なら、そんなに気にしないんだろうけど）

男の方が重い物を持つのは当然と言えるだろうし、たぶん、納得できただろう。けれど帝人は男だ。確かに臨也に比べれば、明らかに腕力がないのは認めるが。

「拗ねてるんだ？」

「拗ねてません！」

人間、図星をさされると妙に腹立たしくなるのはなぜだろうか。おい、と横を向き断言する。

「かわいいなあ」

くすくすと臨也が笑う。ひどく楽しそうに。何がそんなに楽しいのかわからない。しかも、いつたい何がかわいいのかもわからない。

臨也の思考も迷惑も全てが謎だ。人間好きの彼にとって、人間のあらゆる言動が『かわいい』のかもしれない。

「機嫌なおしてよ」

「知りません」

そんな会話を交わしていたが不意に、ぴた、と臨也の足が止まった。

「臨也さん？」

どうしたんですか、と尋ねると、臨也が彼の腕で帝人を隠すように制したのは同時だった。

「？」

不可思議に思いながら臨也の視線の先を見て、深く納得する。

そこには恐ろしい形相をした静雄が立っていた。

「いいいいいざああああああくんよう、性懲りもなくまた池袋に来やがったなああ！」

声音は低く、憤怒が含まれている。

（うわあああああ！）